

# おほりのいしじい

はじり ひろこ





# おほりのいしじい さく はじりひろこ



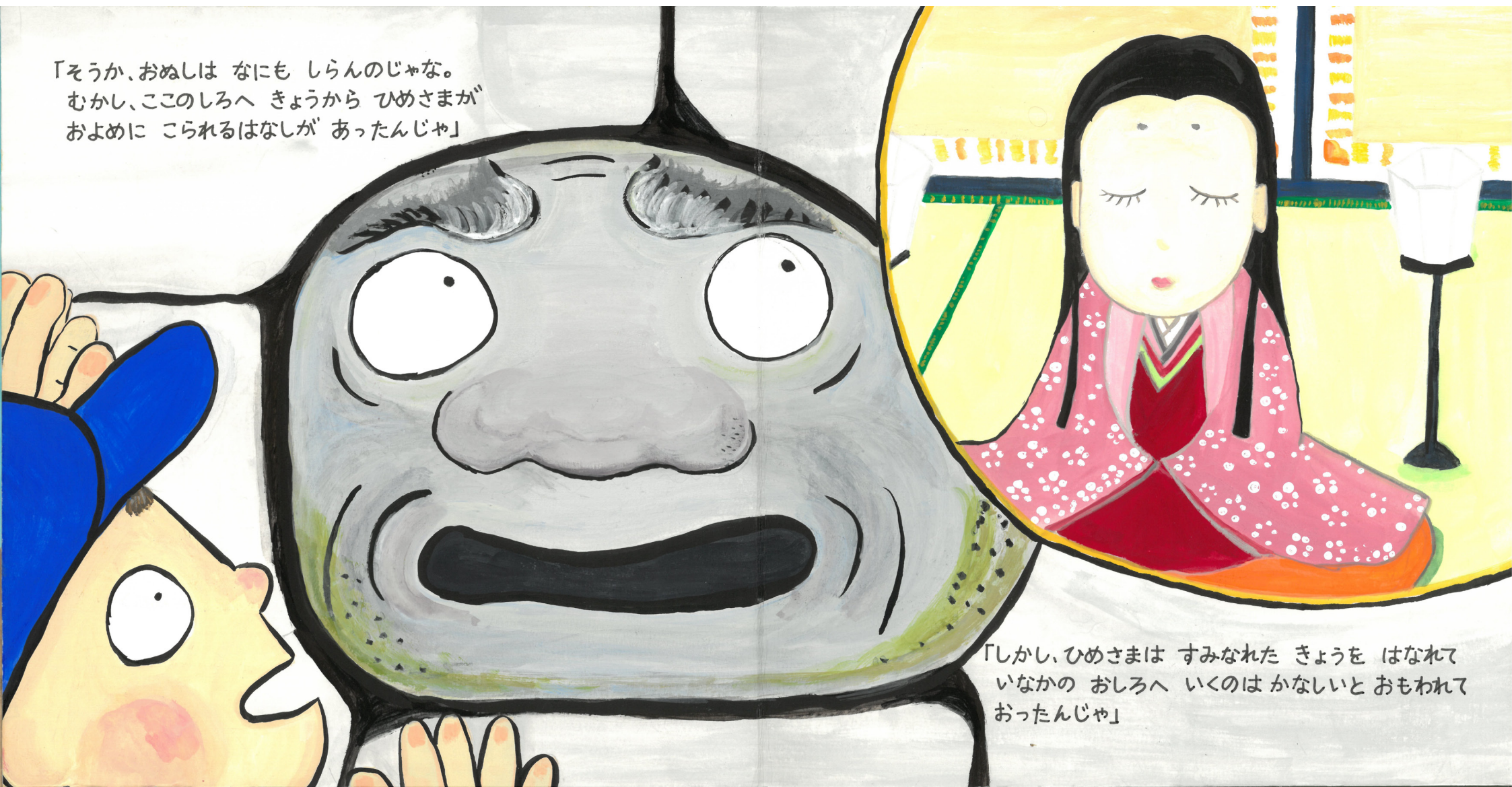
「おーい、ボールなげて」  
「いくよー」  
「あぁ、たかすぎるよ！」

「あいたたた」  
うしろで こえが しました。  
「あっ、ごめんなさい」  
ふりかえったけれど だれもいません。  
「あれっ？」  
だれのこえ だったんだろ？」



「わしじゃ、わし」  
「えっ、いしがしゃべった?!」  
「なんと しつれいな。  
わしは いしじいだ。  
ながいこと ここにおる。  
ところで、しろは どこじゃ」  
「おしろなんて ないよ」  
「むむ、ねむっとる あいだに ときが  
たって しまつたようじゃな。  
では、ひめさまも おられんのか」  
「ひめさまって？」

「そうか、おぬしは なにも しらのじゃな。  
むかし、このしろへ きょうから ひめさまが  
およめに こられるはなしが あったんじゃ」



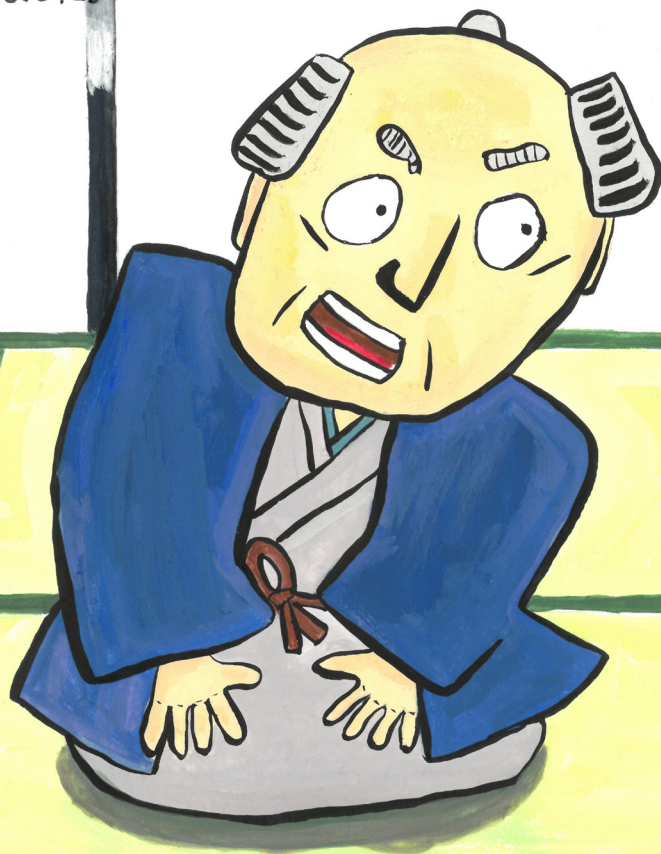
「しかし、ひめさまは すみなれた きょうを はなれて  
いなかの おしろへ いくのは かなしいと おもわれて  
おったんじゃ」

ひめさまが きょうを はなれたくないときいた しろのものは おおあわて。  
「えらいこっちゃ。ひめさまがいらっしゃら  
なんたら たいへんじゃぞ」  
「どうすれば いいんじゃ」  
「なんとか ならんもんか」



「そうじゃ！  
そのむかし、しろのまわりに  
ほりをめぐらし、おひめさまを  
むかえたことが あったそうじゃ。  
わしらも、しろの まわりに  
おほりをつくり、りっぱなやぐらを  
たてようじゃないか」  
「そりゃあ ええな」

「そうときまれば すぐに なぬしたちを よべ」と  
さっそく あっちのむらと こっちのむらから  
なぬしが よばれました。



はなしをきいた なぬしたちは おおはりきり。  
「そりゃ、とのさまのたのみじゃ。  
むらのもん みんなで やりますぞ」  
と、あっちのむらのなぬし。  
「ひめさまの ためじゃ。  
さっそく とりかかりましょう」と  
こっちのむらのなぬしもまけじと  
こたえました。



そして、おほりづくりが はじまりました。

あっちのむらのもんは、しろのまわりを  
ほって つちをはこびました。

「さあ、ほるぞ」

「こっちのむらのもんに まけるな」

「しっかり はこべよ」

「うへえ、おもい おもい」



こっちのむらのもんは、おおきないしを  
はこんで つみあげました。

「どっこいしょ」

「あっちのむらのもんに まけるな」

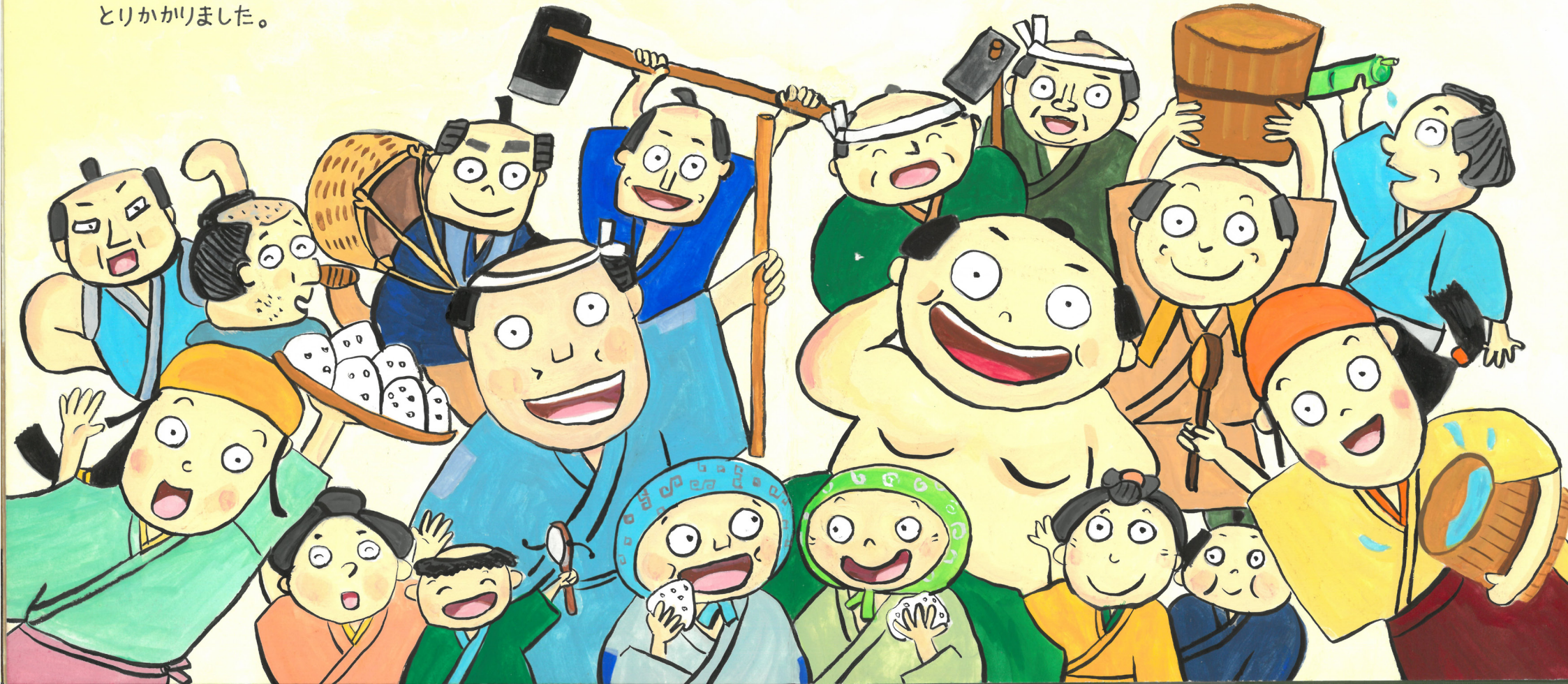
「ほら、おおきな いしも なんのその」

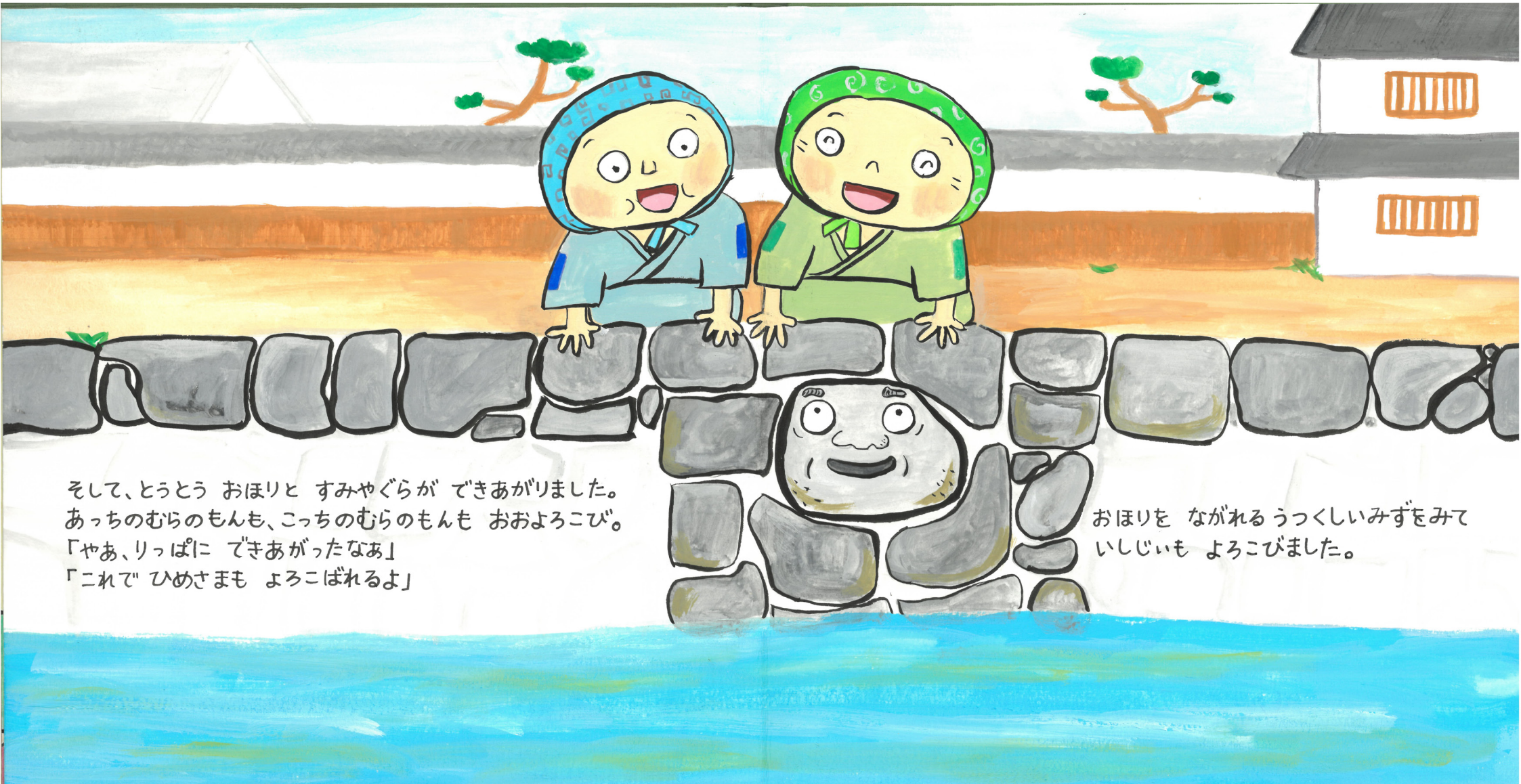
「うへえ、なんて ばかぢからだ」



ふたつのむらは きそうように おほりを つくりあげました。  
そして、やすむまもなく すみやぐらづくりに  
とりかかりました。

しろのまわりは たくさんのひとで、  
まっりのような にぎわいになりました。





そして、とうとう おほりと すみやぐらが できあがりました。  
あっちのむらのもんも、こっちのむらのもんも おおよろこび。  
「やあ、リっぱに できあがったなあ」  
「これで ひめさまも よろこばれるよ」

おほりを ながれる うつくしいみずをみて  
いしじいも よろこびました。

「へえ、そんなことがあったのかあ」  
「このはなしを きいた ひめさまも たいそう たのしみに  
このしろへ こられたんじゃ」  
といじいはいいました。



「わしも ひとめ ひめさまを みたかったんじゃが、  
しっかり くまれたおほりは びくともせん。  
なんとも ざんねんなこと じゃったわい」

